

II 本校の研究について

研 究 部

1 研究テーマ

『自立に向かう子どもたち』

－自分で決める場を大切に－

2 研究の経緯

本校では、昭和59年度以来「自己教育力」の育成を中核として研究を進めてきた。そして、平成5年度から平成7年度までは『豊かな感性を育む』を研究テーマとし、自己教育力の育成を、子どもの豊かな気づきや感じとりを育む支援という点に焦点をあてて研究を行った。ここでは、どのような場を設定し、どのような学習ステップを設け、その各ステップにおいてどのような支援の手だてをこころざれば、一人一人の子どもが自分の実感をもとにした、その子ならではの見方・感じ方(=個性)を覚醒させることができるかということ、各教科・領域の授業の中で明らかにしてきた。

同時に、子どもたちの現実を見つめると、各教科・領域を含んだ「子どものくらし」全体を見据えたトータルな視点が必要であることが明らかになってきた。そこで、子どもの現在の課題・今後身につけてほしい資質や能力について、考えられるだけ項目を出し合い整理していった結果まとめられたのが「自立」である。

これを受け、一昨年度より研究テーマを『自立に向かう子どもたち』とし、めざす子ども像を、「発達段階に応じて、他との関わりの中で、自ら考え、判断し、行動できる子ども」として研究に取り組むこととした。ここでいう「他」とは、自分以外の他人・物・自然など、自分をとりまく全ての環境のことであり、これらとの関わりの中で、主体的に思考する態度や問題解決能力を身につけ、自分に自信を持ち、自分らしさを追究していくことができるようになることをめざしている。

3 研究テーマについて

「自立」とは、生き方のことであり、主体的人格(自分の生き方)の形成のことを言っている。しかし、日本の社会の中で、学習成績が大きな意味を持ちすぎている今、子どもたちの自立が望ましい方向に向かっているとは言いがたい。競争の中で優位に立つことによって、人間的価値を点数や学力偏差値で計るようになってきたり、自分がわかる喜びや自分でできる喜びという部分だけが肥大化したりと他者とのランクづけの中に自分のアイデンティティを見つけ出そうとしているのではないだろうか。

また、満ち足りた家庭で暮らすことにより、視野が家庭に限定され、自分について自信がないまま、心理的に家庭に依存していたり、自分からものごとを考え、決断していく態度を持てなくなってきたりしている。

このような現状の中で、学校の果たす役割は「子どもの自立の促進、自立への援助の過程」と言うことができる。学校(授業)は、子どもにとってかけがえのない「生活の場」である。その中で、子どもたちは人間や集団、学習すること等についての価値意識を形成していくのである。だからこそ、われわれは、知識や認識の形成と同時に、人格発達の視点から授業を組織していく必要がある。学び合う集団を保障し、子どもたちを学び合いの主人公へと高めることで、あらゆる生活場面での自立へつなげるものと考ええる。

そのためには、まず、おとなが自らの個性や自立を問いただし、子ども一人一人に即した自立を考えることが大切となってくる。このことは、学校だけでなく家庭や地域と連携して行われることが必要である。これからの将来に向けて、国際化の社会の中で、子どもたちにどんな力をつけていくのか、生きて働く力とはどういう力なのか、どのような生き方をして欲しいのかなど、共通理解の上、共同で推し進めていかなければならない。学校は、その情報発信の拠点となることが要求されるのである。そして、おとなは子どもが自立していこうとする存在であることを信じて、支援する側にまわるわけである。

以上のように考えてみると、これからは、個を志向しつつ、内面的な自立を奨励する教育、子ども自らが主体的に考え、判断し、行動できるような教育活動がテーマ実現に向けて不可欠になってくる。表現活動、探究活動、体験活動などを重視し、学習成果を自らが確認できるようにしていくこと。このことが、固有の見方、感じ方、物事を判断するときの基準などを確立していくことになると考える。さらに、安定した自己評価を助けるような一貫した支援が必要であり、自己決定が自己責任と自己信頼に結びつくよう指導することが大切である。これらのことが、温かい雰囲気の中で一貫性を持って行われることが、自己決定に必要な力を育てるものと考えられる。

4 昨年度の取り組み

(1) サブテーマの設定

子どもたちの「自立」に向けて大切にしたいことはいろいろと考えられるが、何よりもまず「自分で決める」ことが重要であると考えた。それは、自分で決めるためには既有的な知識や日常の経験などを総動員しなければならないからである。また、課題が身近に感じられ、納得のいく結果を出したいという気持ちから没頭した活動になりやすく、結果に対して成功・失敗の原因を自ら振り返り、次の活動への意欲がわきやすくなる。そして、このような活動の繰り返しが、自分の判断・行動に対して責任感をもたらすものと考えられる。

そこで、研究テーマ『自立に向かう子どもたち』にせまる切り込み口として、サブテーマ「自分で決める場を大切に」を設定した。

(2) 教科・領域の授業

各教科・領域において、それぞれ「自立に向かう子ども像」を明らかにすると共に、その具現化に向けての「研究の方向性」を出していった。その中で、多く示されている語句を抽出してみると次のようなものが挙げられる。

- | | | | |
|-----------------|-------|------|------------|
| ○学び方の習得 | ○課題意識 | ○見通し | ○自己決定、意志決定 |
| ○学習内容と日常の事象との関連 | | ○体験 | ○学習内容の発展 |
| ○総合的な学習、他教科との関連 | | ○共生 | ○ふりかえり |

(3) 学校行事の見直し

各行事が、研究テーマにそった内容・運営になっているかどうかを検討し、精選・補充していく。一つ一つの学校行事について、「ねらい」と「内容」を吟味し、一覧表に表すと共に、低学年・中学年・高学年の枠組みでそれぞれの「ねらい」を明確にし、「自立」にせまるための行事を確立していった。

特に、集団宿泊的行事がテーマ実現に向けて重要な位置を占めることから、「ねらい」「場所」「時期」「内容」などについて検討を重ね、第3学年から宿泊学習を実施することを決めた。しかし、従来から行っている宿泊学習との関連から、新しい宿泊学習の完全実施を平成12年度としている。

(4) 総合的な学習の創設

研究テーマの実現に向けて教育内容を検討していく過程で、現在の教科・領域の枠に限定されない、実感や達成感をもつことができる体験、考えたり、判断したり、行動したりする基礎となる体験が必要であると考えた。その中で、子ども一人一人の興味・関心に基づいた追究活動が展開されていくのである。自らの課題を設定し、自らの解決方法で、自らのペースで、失敗を恐れず自らの結果を出し、自らの方法で表現し、ふりかえる。これら一連の学習を通して、一人一人の子どもが自信をもち、自分らしさを追求していく力、すなわち個性の伸長を図ることができるのである。

中でも、重要視したのが次に挙げる視点に立つ活動である。

- (ア) 自然・人間との一体感が味わえる体験活動
- (イ) 自分で立てた計画にそって学習を進める体験
- (ウ) 自分の興味・関心に基づいた追究活動
- (エ) 自己理解（自分見つけ）に向かう活動
- (オ) コンピュータの活用

以上のような基本的な考え方を基に、子どもたち一人一人の興味・関心を出発点とし、子どもたちが自ら進んで自分らしさを追求していくことを願い、「総合的な学習」を創設することとした。子どもたち自らが考え、決定し、責任をもつ自己活動。これが、本校の総合的な学習である。その第1歩として「人間」「環境」「自分タイム」「コンピュータ活用」の4つのプロジェクトを編成し、領域別年間計画の作成及びねらいの達成に向かってきた。

5 本年度の取り組み

昨年度からの研究テーマ『自立に向かう子どもたち』を達成するには、短い期間の取り組みでは不十分である。表面的な流行に流されることなく、自分の感性を基にした思考力・判断力・行動力を持ち、広く情報を求めながら一步一步確実に本当の自分を創り上げていく自己実現に向かうためには、今までの研究よりずっと長い時間が必要になってくる。また、現代社会からの要請、生涯学習の面からも、本校の研究テーマは重要なものだと考える。

そのため、本研究テーマ『自立に向かう子どもたち』を、現時点で、少なくとも2クール継続することとし、その第1クールとして、サブテーマ「自分で決める場を大切に」の追求を3年間行うこととする。本年度は、その2年目であり、昨年度の計画、実践に基づき《実践を積み重ねる》ことに焦点をあてた研究を進めることとした。

(1) 教科・領域の授業

教科・領域においては、教科ごと、単元ごと、さらには学習展開の場面の違いにより、「自分で決める場」はいろいろな形を取るものと思われる。いずれの場合も、自分で決めることは、子どもたちの学習態度を、他律から自律へ、受動から能動へ、結果重視から過程重視へと変化させていくことが期待できる。また、それが次の場での、自分で決めることの質を高めていくことにもなる。

本年度も、各教科・領域における基本的な考えを出し合い、授業研究、日々の実践を中心に研究を深めてきた。

(2) 学校行事

昨年度の見直しを基に、各行事の「ねらい」にせまる内容を追求し、微調整を加えていく。さらに、総合的な学習との関連を明確にしていくことを課題とし、子どもの暮らしとのバランスを考慮しながら、次年度に向けての精選・補充を検討することとした。

本年度は、月行事として「児童朝会」を新設、集団宿泊的行事として第3学年で「山の学習」、第4学年で「海の学習」を実施し、テーマにせまる手だてとする。

(3) 総合的な学習

本年度も「人間」「環境」「自分タイム」「コンピュータ活用」の4つのプロジェクトを編成し、研究・実践を深めていくこととした。

① 学年別年間計画の作成

昨年度の領域別年間計画と実践・反省を基に、本年度は学年別年間計画を作成し、「実践を積み重ねる」ことに焦点をあてた研究を進める。

内容の選択にあたっては、

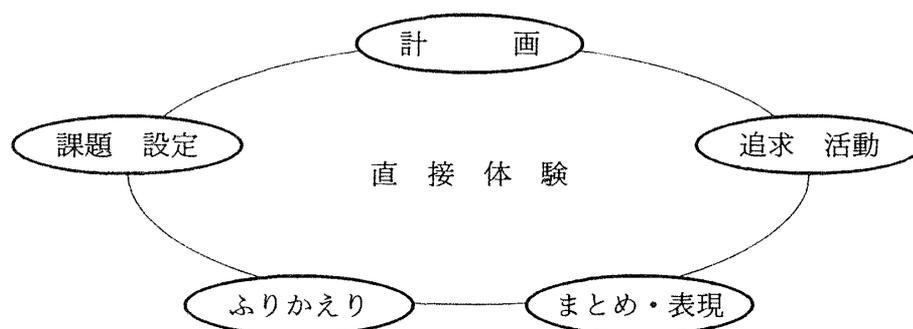
- ・子どもが本気で活動できるものであるか。
- ・人と人とのつながりを直接体験するものになっているか。
- ・人が生きていく上での諸問題に直接関係しているか。
- ・その子の価値観を深め、その後の生き方を考えさせるものになり得るか。

ということを観点にし、子どもの実態を十分考慮していくものとする。

② 基本的な学習の流れ

総合的な学習を進めるにあたって重視しているものが「直接体験」である。体全体を通しての体験は、実感、満足感、達成感、自分発見など、子どもたちが自立に向かっていくために大変重要なものを与えてくれるものとする。それらは、子どもたちの人格形成に深く影響を与え、個性をも目覚めさせてくれる。また、抽象的な思考を育む上での土台となると共に、考えたことの検証の場にもなるものである。そのため、体験をふりかえり、体験で得たものを焦点化し、一人一人の子どもへの課題へ実らせることができるようにする必要がある。

本校の考える「直接体験」を中核にした、基本的な学習の流れは次のようになる。



③ 学習環境整備

総合的な学習が子ども主体の活動になるために、そして、子どもの思いに応えるために本年度は、次のような学習環境の整備を行っていくこととした。なお、この学習環境整備は数年間をかけて継続して行っていくものとする。

(ア) 人的環境の整備

担任，専科，保護者によるネットワーク体制づくり

(イ) 物的環境の整備

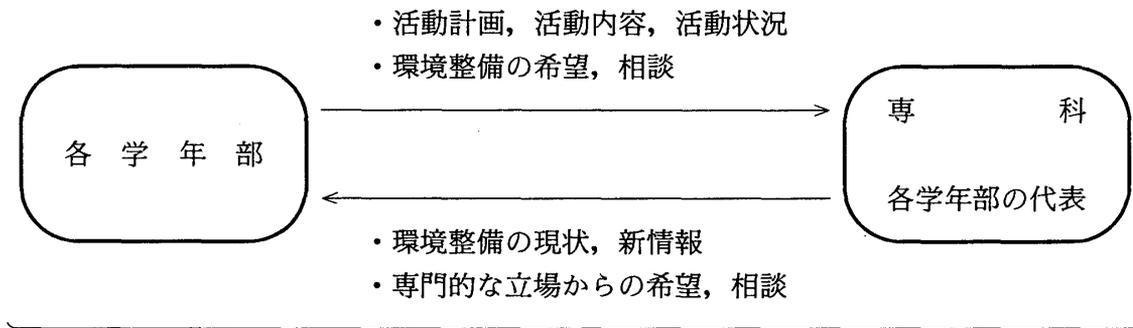
- ・体験場所，公共施設に関する資料整備
- ・インターネット環境整備
- ・図書室の整備，充実
- ・特別教室の整備，充実

(ウ) 場の整備

- ・児童朝会
- ・発表展示会

- ・ 掲示板，放送の利用

なお，環境整備に関する手順は，おおむね次のような流れになる。



- ・ 活動計画，活動内容，活動状況
- ・ 環境整備の希望，相談

- ・ 環境整備の現状，新情報
- ・ 専門的な立場からの希望，相談

全体会

④ 教科・領域との関連

総合的な学習と教科，特別活動，道徳教育との内容の関連について整理し，本校の考える総合的な学習の位置づけを明らかにしてきた。

どの教科，領域においても「めざす子ども像」に変わりはない。研究テーマ「自立に向かう子どもたち」をめざして，教科，領域，総合的な学習の特性を活かした活動を展開しているという立場から話し合ってきた。

つぎに，それぞれの特性を挙げる。(教科については，それぞれの基本的な考え方を参照)

《特別活動》

- ・ 集団活動を通して
- ・ 集団の一員としての自覚
- ・ 自主的，実践的態度

《道徳教育》

- ・ 道徳的心情
- ・ 価値
- ・ 道徳的实践力

《総合的な学習》

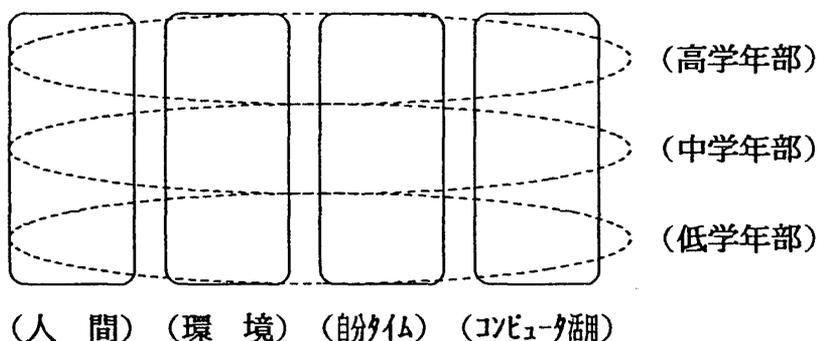
- ・ 自分で決める
- ・ 自分自身を高める，伸ばす，ふりかえる

もちろん，子どもの実態に応じてそれぞれの活動が展開されること，結果ではなく過程を重視していくことなど大きな共通点もある。本校の総合的な学習は，前述のように子どもの実態から創設されたものである。本校の子どもたちにとって望ましいと考えられる活動を仕組む上で，既存の教科や領域の枠を取り外した新たな枠組みとしての総合的な学習であると言える。

⑤ 研究推進組織

本年度の取り組みを充実したものにするために，次のような組織で研究を推進していくものとする。

チーフ会 (プロジェクト，学年部，研究部より各1名)



【チーフ会】

- ・総合的な学習と教科，道徳，特別活動との関連についてまとめる
- ・総合的な学習のねらいの検討
- ・各プロジェクト間，各学年部間の調整

【学年部会】

- ・各領域配当時間の検討，年間計画の作成
- ・発達段階に照らし合わせた内容の検討，修正
- ・環境整備のための希望，要求をまとめる

【プロジェクト会】

- ・総合的な学習と教科，道徳，特別活動との関連について検討
- ・全体のねらいと各学年の内容の検討
- ・プロジェクトのねらいと各学年のねらいの調整

⑥ 授業時数について

- ・ゆとりの時間と火曜日の学級裁量の時間を活用し，週2時間×35週をあて，年間の総時数を60時間程度とする。
- ・総時数の60時間を均等割りし，4領域の時数をそれぞれ15時間程度とする。
- ・低学年においては，生活科の学習を基本とし，その充実を図る時間として位置づける。ただし，「コンピュータ活用」については，年間15時間をあてる。
- ・高学年に向けて，「自分タイム」が充実するように時間を設定する。
- ・この年間の総時数は，試案として位置づけ，教科や特別活動の見直しなどと合わせて今後検討（増減）していく。

という基本的な考え方を受け，次のように設定する。ただし，各学習の実施時期や時間の取り方（まとめ取り型，分散型など）については，各学年の裁量で決定することとする。

	人 間	環 境	自分タイム	コンピュータ活用
低学年	/	/	/	15
中学年	15	15	15	15
高学年	10	10	28	12

単位：時間